かわら版
哲学たいけん

第 22 号
編集発行／碧南市
哲学たいけん村
無 我 苑
所 在 地／碧南市坂口町3-100
〒447-0087：TEL. 0566-41-8522
：FAX. 0566-41-7761

名誉村長特別講演会

演題　「円空の仏像」
講師　哲学たいけん村無我苑名誉村長　梅原　猛氏

円空と私

五年前、岐阜県が郷土出身の円空を顕彰しようと「円空大賞」を創設した。円空のごとく土着的で先進的な芸術家を顕彰しようという趣旨であり、その選考委員長を依頼された。それまで、円空とともに扱われることがある木喰についてはいくつか論文を書いたが、円空についてはよく分からなかったのでまったく書いていなかった。ところが、選考委員長となり、いちおう円空仏を見ておこうと全国各地を回った。特に愛知県は円空仏が残っている数は一番多いのだが、全国各地の円空仏を見て回っているうちに突如として円空が私の中に入ってきた。

なぜ円空なのか

円空仏のある寺はほとんど白山信仰の寺である。白山信仰の開祖で神仏習合を最初に行ったのが泰澄であり、私は非常に強い関心を持っている。そして泰澄から神仏習合の思想とその思想を木彫仏であらわす方法を学んだ行基。そしてその思想と木彫仏の制作は弘法大師空海に受けつがれ、完成される。円空はこの泰澄・行基・空海の神仏習合思想に沿って、あの異形の仏像や神像を制作したのではなかろうか。このような認識の光がさすと、私はいてもたってもいられなくなった。ちかく、円空に関する本を書く予定である。

仏師としての円空

円空は寛永九年（一六三二年）岐阜県羽島市上中町の生まれである。町では彼は「まつばり子（私生児）」であるという伝承が残っている。円空は生まれながらにして父が分からず、また、子供のときに母をなくしたらしい。そして僧になり、愛知県師勝町の高田寺で真言密教の修行をしたという。円空はそこで白山信仰の修験者になり、そこにある行基仏をみて、自分もそのような仏像を作ってみたいと思ったのであろう。その後岐阜県郡上市美並町を本拠としながら旅から旅への一生を送りながらたくさんの仏像をつくった。作品からみて、円空の作品は三期に分かれる。第一期は寛文三年（一六六三年）から十年まで。この時代の円空仏は儀軌に忠実で、十一面観音像が主体である。この時代の代表作は名古屋・鉈楽師の仏像と彼の故郷、羽島の中観音堂に作った仏像であろう。第二期は寛文十一年から延宝六年（一六七八年）まで。この時代に護法神像が登場する。そして弥勒信仰が生まれる。像は甚だ自由になり、現代の抽象芸術を思わせるものである。この時代の代表作は名古屋・荒子観音の仏像であろう。第三期は延宝七年から元禄八年（一六九五年）まで。この時代に円空独自の思想が生まれ、主尊がやはり十一面観音であるが、脇侍が善女龍王と善財童子のものが多い。そして秋葉神や、稲荷神というキツネや、カラス天狗の像が多く作られる。最後の作品は、

西尾市徳永町　浄名寺観音菩薩像
（写真提供＝西尾市教育委員会）

廃仏毀釈の時に、伊勢にあったものが海に捨てられ、大浜湊（碧南市）に流れ着いたと伝承される。実際には、廃仏毀釈の空気の厳しい伊勢を逃れて、三河の地に船で運ばれてきたものであろう。仏の顔以外、ほとんど生木のままで、斜め前をむいてクッとあげた顔には、あどけなさの中に色っぽさがある。そして木の節が乳の形のようになっていて、豊かな乳房を思わせる。不用な木を見事に利用して仏にしたといえようか。

岐阜県洞戸村・高賀神社にある、木の柱のような細長い三尊像である。木から生まれた仏さまがまさに木に帰ろうとしているかのようである。円空はこの仏を作り終わると、歓喜仏に「釜且入定也」という字を彫る。「釜」は六四歳を表し、「且」はしばらく、「入定」は死を表し、六四歳になったらしばらく死ぬという意味であろう。円空はその言葉通り、三年後、六四歳の時に食を断ち、穴に入り、死んでミイラとなり、五六億七千万年後の弥勒仏の到来を待った。

彼の人生を今の時点でどうみるか

円空はまた歌も詠んだ。一首挙げると

皆人は仏になると願いつつ
まことになれるけさの杉の木

ただの杉の木でも、皆が願っている限り杉の木もまた仏となるという日本人の思想、こういう思想がある限り円空が杉の木で仏を作るのは当然であり、また、人は皆仏になれることを示そうとしてこれだけ多くの仏を作ったのであろう。

円空は盛んに護法神を作ったが、その後、神は仏を助けず、仏教を弾圧した。廃仏毀釈は仏ばかりか神をも殺したのである。われわれは形式的には仏教徒であり神道信徒であるが、実は仏も神も失っているのである。そういう精神の砂漠でわれわれは生きている。現代におけるさまざまな精神の退廃はそのような精神の砂漠を原因としている。この神と仏を取り戻さないかぎり、日本の霊性は回復しない。

今年、高野山、熊野一帯が世界遺産に登録されたが、そこはまさに修験道の地であった。神と仏の共存する日本の霊性への回復が今の日本の課題である。

円空は単なる芸術家ではなく、そのような日本人の精神への回帰の必要性を教える偉大な思想家でもある。

清沢満之記念館オープン

昨年十月、伊藤証信と同じく碧南の地で終焉を迎えた哲学者・宗教家の清沢満之を讃える記念館がオープンした。

▼碧南市浜寺町二丁目十九番地二（西方寺内北側）
▼開館日　金・土・日・月曜日及び祝日　午前十時から午後四時三十分
▼入館料　三百円（中学生以下無料）

清沢満之　きよざわまんし

1863年６．26～1903年６．６
宗教家。名古屋黒門町（名古屋市東区）に生まれる。
父徳永永則、母タキ、幼名満之助。1874年（明治７）愛知外国語学校（愛知県第一中学校の前身）入学、1877年公立医学校（名古屋大学医学部の前身）入学、９月に退学し翌年得度、東本願寺育英校に入学。1882年東京大学に編入学、1887年同大学院に入り宗教哲学に没頭、のちの教団改革の論拠となった。1888年25歳で京都府立尋常中学校長となり、同年清沢やすと結婚、大浜（碧南市浜寺町）西方寺に入る。1890年苦行僧を思わせる禁欲生活に入り、ますます憂宗の念を固め議会制度を要求するなど、その喀血と闘いながら教団改革運動に奔走した。1895年結核療養のため兵庫県須磨に転地、翌年居を京都に移し、同志と教団改革派の機関紙『教界時言』を発刊、1898年これを廃刊、「臘扇記」を起稿した。1899年新法主補導となり東上、1900年暁烏敏らと浩々洞を創設、真宗大学学監となったが、1902年辞して自坊に帰る。哲学、思想、宗教に精通し、西田幾多郎は、「哲学研究者は随分あるが、日本の哲学者というべきは大西祝と清沢満之である」と評した。名古屋市筒井小学校に碑がある。
（愛知百科事典より）

伊藤証信と清沢満之

最近、清沢満之を特集した雑誌等で伊藤証信の名前も取り上げられることがあり、清沢満之と伊藤証信との関係をご質問いただくことがたびたびありました。そこで、満之と証信の関わりについて現在分かっている範囲で記してみたいと思います。

証信と満之の出会い

伊藤証信が真宗大学に進学した明治二十年代後半頃、東本願寺は焼失した本堂の再建と長年にわたる負債整理のため、なりふりかまわない財源の獲得に狂奔していた。本山の執事渥美契縁は信徒から上納金を要求し、額の多寡によって寺格の等級を変えるなどしたため、宗門は賄賂が横行し、堕落しきっていた。こうした状況の中、清沢満之を中心に若手僧侶たちは決起し、教徒に教界時言社を設立、機関誌「教界時言」を創刊し、教団改革を訴えた。余談であるが清沢と対立した渥美は、これ以前に清沢を碧海郡大浜（現碧南市）の西方寺に世話したこともあり数奇な運命を感じるところである。当時真宗大谷派の僧侶であった証信が真宗大学に進学したのは明治二九年であり、その頃にはこの紛争も終わりかけていたが、清沢の思想と人柄に惹かれ、一学生として教界時言社に出入りしていたようである。

その後東京にて

清沢らの教団改革運動は渥美執事を失脚させたことにより、一応の収拾をみることになるが、清沢は本山より除名処分を受け（翌年解かれる）西方寺に帰る。

ところで、真宗大学は古くは江戸時代の高倉学寮に端を発しているが清沢が教団改革運動で訴えたことのひとつでもある東本願寺における近代的な教育制度・組織の確立は、明治二九年に真宗学を初めとする仏教学全般の専攻と研讃とを目的とする真宗大学と、専ら布教に役立たせるための高倉大学寮とに分かれたのみで実質の改革は全く行われていなかった。しかし、明治三一年、本山の新法主である彰如に請われた清沢は、真宗大学の東京移転、大学運営費の保障、学制・教育方針の一任の三つの条件をつけて要請を受け入れ、真宗大学の運営に乗り出すこととなった。その約束どおり明治三四年真宗大学を東京巣鴨に移転させ、真宗大学初代学監（学長）に就任した。この年の七月に真宗大学本科を卒業して研究科に進学した証信も大学の移転にともない東京の巣鴨に移った。

清澤　満之
（写真提供＝西方寺）

清沢は一年後の明治三五年十一月に大学の職を辞して大浜に帰る。学監を辞職した理由は清沢が全権的に大学の任務を任せていた者と学生との間の軋轢であったがその責任を取る形での清沢の辞職は、学生達は思いもよらないことで、あわてて百二十名にも及ぶ連署で請願書を提出し、清沢留任のための運動を試みたが徒労に終わっている。おそらく証信もこの連署に名を連ね、悲しんだことであろう。

清沢が大学を去った後

清沢が去ったあとの大学は、それまでの自由な雰囲気は一変して規律づくめの校風となった。特に証信が明治三七年に霊感に打たれ無我愛を悟ったことにより翌年の六月から発行していた機関誌「無我の愛」は、真宗大学当局によって学生が読むことを禁じられ、証信は幾度も学校に呼び出され同誌の内容が真宗の教義と異なっており、その行いは真宗大学学生としての身分を越えていると厳重に注意された。この後、証信は退学、僧籍返上へと一気に進んでしまう。清沢が大学に残っていたならば証信の運動ももっと別の方向に進んでいたと考えられるが、証信の運動は真宗を離れ独自の無我愛運動として展開していくこととなった。ただし、証信が真宗大学から完全に決別したかというとそうではない。「無我愛」を広めるにあたっては、清沢を中心に同志で発刊した『精神界』と、清沢の門下生ともいうべき真宗大学の学生が発言の拠りどころとした『無尽燈』の読者名簿から心当たりの人に宣伝をし、これらを足掛かりに全国に機関誌の読者を増やしている。

碧南とのつながり

清沢満之は、明治二一年大浜西方寺の清沢やすと結婚しており、明治三五年大学を離れた後大浜西方寺に帰り、翌年西方寺にて没す。証信もまた大正十二年の関東大震災後混乱の続く東京では無我愛の伝道活動が十分に行えないなどの理由と無我苑初期から親交のある安城や岡崎の仲間の勧めもあって地元青年団である竜灯団の待つ西端へと移住し、活動を続けた。昭和九年無我苑の講堂兼居室が新築されたとき、証信の活動に賛同した暁烏敏、近角常観など清沢のもとで開かれた浩々洞に出入りしていた著名な者からの寄付もあった。その後昭和三七年西端無我苑にて没す。

〈参考図書〉
伊藤証信とその周辺　柏木隆法
評伝　清沢満之　脇本平也

後期哲学講座「哲学の始まり」を終えて

今回の哲学講座は哲学たいけん村無我苑の命題である「哲学たいけん」を考えるうえで重要なきっかけとなる「不思議に思う」「疑う」「不安を抱く」という感情をテーマに哲学の根源的な始まりと各人の中における哲学の始まりを考える三回の講座が開催された。

期間　平成十六年十二月四日から
　　十二月十八日まで
講師　久野　昭氏（無我苑顧問）

〈受講者の感想〉

不思議、疑う、不安を抱く、大変よいテーマであったと思います。日常の生活の中で、生と死について思う時、考え思う事の根底に哲学としての考えが必要なように思われてきました。又、笑いの中にも哲学としての考えがあるのではないかと思うようになりました。笑うのは人間のみであり笑いは人間的価値の機会でとらえる必要のように感じています。もっと身近な日常生活の中での哲学について思いを深めることの必要性を感じています。人間としてのあたえられた人生をどういきるか。明るく、楽しく、逞しく、そんな言葉を信じて、自分自身の哲学を持ちたいと思っています。私の人生にとって大変貴重な講座であったと思います。〝なぜ〟こそ自分に問い続けていきたいと思っております。

本の情報

喪章をつけた千円札の漱石

伝記と考証

原武　哲著　笠間書院　二〇〇三年

「時、あたかもこの数十年馴れ親しんだ漱石の千円札が、二〇〇四年七月をもって野口英世に席を譲って勇退するという。やがて二年後には姿を消すことだろうが、漱石の作品が消えてなくなることはない。作品論は誰かがやってくれるだろう。不敏な私は基盤となる基礎的資料を整理する伝記と考証の調査に傾注した。研究書にしてはアカデミックでもなく、抒情的でもない、奇異なタイトルを付けたが、奇を衒って受けを狙ったわけではなく、論文の一つを書名に借りたまでである。」（二〇〇三年著　あとがきより抜粋）

あとがきにあるとおり、著者は作家に関する事実を関係者から聞きだし、丹念に調べていることが伺える。なかでも哲学たいけん村として注目したいのが「第一〇章　夏目漱石とある無名文学婦人と伊藤証信　―夏目漱石・森田草平書簡の紹介」である。一九八二年に見つかった西房子という婦人と夏目漱石・森田草平が交わした書簡をもとに、伊藤証信との関係を含め細かな史実を積み重ねた興味深い章である。

お知らせ

涛々庵茶会・三曲演奏

涛々庵茶会は毎月それぞれの席主の創意工夫がなされ、華やかな茶会となっております。また、昨年度から茶会に華を添えるべく三曲の演奏を安吾館にて行ってきました。三曲演奏による風流な音色が無我苑内に響き渡り、たいへん好評でした。本年度も引続き行いますので、ぜひお越しください。

料金は一服四百円、時間は各日とも十時から十五時まで（立礼茶席は十六時まで）です。また、三曲の演奏はお茶会にあわせ随時行っております。

平成17年度涛々庵茶会・三曲演奏予定表

月　日	涛々庵茶会		三曲演奏	
	席　主	流　派	箏　曲	尺　八
平成17年 4月24日	高山　恵子（宗恵）	表千家	祥友会	祥友会・竹秀会
5月22日	杉浦みどり（宗翠）	裏千家	永坂会	竹秀会
6月26日	杉浦　時子（宗時）	宗偏流	若草会	竹秀会
7月24日	小島　和美（宗美）	裏千家	絲音の会	竹秀会
8月28日	沢田　教子（宗教）	表千家	祥友会	祥友会・竹秀会
9月25日	小沢わさ子（宗和）	松尾流	若草会	竹秀会
10月23日	小笠原　利（宗紅）	裏千家	永坂会	竹秀会
11月27日	小笠原芙美（宗文）	久田流	祥友会	祥友会・竹秀会
12月18日	山田　　昇（宗昇）	裏千家	若草会	竹秀会
平成18年 1月22日	杉浦　とめ（宗登）	久田流	永坂会	竹秀会
2月26日	磯貝　勝代（宗代）	裏千家	祥友会	祥友会・竹秀会
3月26日	杉浦　伸子（宗伸）	裏千家	絲音の会	竹秀会